

The University's Lectures as One of the Supports for Children and Parents: A Questionnaire about the University's Female Student's Experience of Child Rearing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): support for infants and parents, experience with child rearing, experience with having contact with children 作成者: SESEKURA, Tamana メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3911

BY-NC-ND

子育て・子育て支援としての大学講義 —赤ちゃんとの関わり体験調査—

心理学部 心理学科 瀬々倉玉奈

要旨：原田(2006)は、大阪レポート(1980)と兵庫レポート(2003)の結果をもとに、現代の母親の子育てに関する困難感は、深刻化する少子化の影響もあり、母親自身が少女から成人へと成長する過程において、育児経験や子どもとの接触経験が不足していることにあるとしている。

筆者は、原田の調査結果の一部を追試することを目的として、女子大学生を対象に育児経験と子どもとの接触経験について調査した。その結果、そのいずれもが、原田が2003年に実施した兵庫レポートの結果よりもさらに減少していることが理解できた。

昨今の子育ての難しさを改善するためには、子育て中の養育者とその子どもらへのサポートを充実化することはもちろんのこと、老若男女を問わず異なった立場の者それぞれが、当事者として子育てについて考える必要がある。従って、子育て・子育て支援の一貫という展望をもった大学における講義には意義がある。

キーワード：子育て・子育て支援、育児経験、子どもとの接触経験

1. 問題と目的

子育てが難しい時代といわれて久しく、子どもが育つことの支援「子育て支援」と、子どもを育てることの支援「子育て支援」、即ち「子育て・子育て支援」(瀬々倉.2002)が必要とされている。

子育てが困難であることと呼応するように、少子化の問題が論ぜられ、その際、少子化傾向を理解する指標の一つとして、1人の女性が生涯のうちに産む子どもの数、合計特殊出生率が使用されている。1966年の丙午の年を下回る合計特殊出生率が確認された1990年は、「1.57」ショックと呼ばれており、前後して国は様々な少子化対策を講じてきている。1994年の「エンゼルプラン」、1999年の「新エンゼルプラン」に十分な効果が認められなかったことから、2002年には「待機児童ゼロ作戦」などが含まれた「少子化対策プラスワン」が、2003年には子育て家庭を社会で支えるという主旨をもつ「次世代育成支援対策推進法」が制定されている(厚生労働省.2012)。さらに、2012年には、子ども・子育て関連3法が制定されるにいたり(内閣府・文部科学省・厚生労働省.2013)、国を挙げた子育て・子育て支援や少子化対策が続けられている。

しかしながら、先にあげた合計特殊出生率は、2000年に1.36人、2013年に1.39人に留まっており、めざ

ましい効果は認められず、少子化傾向は依然顕著である。

原田(2006)は、10か月児健診時に母親を対象とした育児に関する質問紙調査を1980年(大阪レポート)と、2003年(兵庫レポート)とに実施しており、現代女性の育児困難感は、少女時代から成人女性へと成長し、子どもを生んで母親となる過程において、子どもに接する機会が乏しくなっていることが関係していると指摘している。今や、少子化と子育ての難しさとは、いずれが先に生じた問題なのか分からないほどの悪循環の様相を呈しているのである。

小泉(2007)によると、江戸時代の子育てにおいては、母親が妊娠5か月目に締める岩田帯を贈る「帯親」に始まり、産婆とは別に出産に立ち会って臍の緒を切る「取り上げ親」、現在でも一部では風習として残る「名付け親」など、1人の子どもに対して生涯にわたって様々な仮親の存在が認められている。中でも注目すべきなのは、子どもが4、5歳になるまで面倒をみる子守役は「守親」とされているが、自身も6、7歳で子守奉公に出された子どもであることも多かったとされる点である。原田が指摘している現代女性の子どもの関わり不足との差異は著しい。

本調査は、原田が1980年に実施した「大阪レポート」に続いて、2003年に実施した「兵庫レポート」

から10年を経過した現在、自身が子どもの頃から成長していく過程で、育児経験や子どもとの接触経験にはどのような傾向が認められるのかを知るために、近い将来母親になる可能性のある女子大学生を対象にして追試したものである。さらに、本調査の結果をもとに、大学における講義と子育て・子育て支援との関係について考察したい。

2. 調査方法

女子大学生を対象にして、これまでの赤ちゃんとの関わり経験について、質問紙調査を行っている。

調査時期は、2013年4月、2013年9月、2014年4月の各学期の初回講義である。いずれも、筆者が担当する講義の初回の冒頭に実施している。調査対象は各講義を受講する女子大学生であり、同一人物が複数の講義を受講している場合には、初回の調査のみを集計対象としている。調査対象の女子大学生の属性を表1に示す。ここで、「児童」とは、保育及び幼児教育を主として学ぶ領域に所属する女子大学生であり、「非

児童」とは、その他の領域に所属する女子大学生である。なお、調査時期は同一ではないが、調査の目的に鑑みて、特に調査時期による分類をせずに集計している。

質問項目は、出産に関する理解の程度を確認する項目2項、赤ちゃんとの接触経験を尋ねる項目3項、赤ちゃんの育児経験を尋ねる項目2項である。

接触経験と育児経験を尋ねる質問項目については、原田（2006）が行った大規模調査の一部を参考にしている。原田は、10か月児健診時に母親に対して、接触経験に関する質問項目として「あなたは自分の子どもが生まれるまでに、他の小さい子どもさんを抱いたり、遊ばせたりした経験はありましたか」、育児経験に関する質問項目として「あなたは自分の子どもが生まれるまでに、他の小さい子どもさんに食べさせたり、おむつをかえたりした経験はありましたか」という質問内容で調査を実施している。なお、原田は「小さい子どもさん」と表現しているが、本調査及び本稿においては、「赤ちゃん」と表現している。

表 1. 調査対象の属性

	年齢					合計
	18	19	20	21	22	
児童	170 (40.5%)	141 (33.6%)	78 (18.6%)	23 (5.5%)	8 (1.9%)	420 (63.4%)
非児童	78 (32.2%)	84 (34.7%)	44 (18.2%)	35 (14.5%)	1 (0.4%)	242 (38.6%)
総計	248 (37.5%)	225 (34.0%)	122 (18.4%)	58 (8.8%)	9 (1.4%)	662 (100.0%)

3. 調査結果

出産に関する最低限の理解の程度を確認する質問項目として、「赤ちゃんは、お母さんのお腹の中にどれくらいの間いると思いますか」と尋ねた結果を表2の所属と在胎期間に、「赤ちゃん誕生時の平均体重は、どれくらいだと思いますか」と尋ねた結果を表3の所属と出生時体重に示す。

在胎期間については84.7%の者が正答し、出生時体重については89.0%の者が正答している。また、「児童」と「非児童」とを比較した場合、それぞれ7.8%、15.2%「児童」の方が「非児童」より正答率が高くなっている。最も多い誤答は、在胎期間は長めの「12ヶ月」、出生時体重は軽めの「2kg」になっている。

表 2. 所属と在胎期間

	月数					合計
	6ヶ月	8ヶ月	10ヶ月	12ヶ月	14ヶ月	
児童	1 (0.2%)	9 (2.1%)	368 (87.6%)	38 (9.0%)	4 (1.0%)	420 (63.4%)
非児童	1 (0.4%)	11 (4.5%)	193 (79.8%)	31 (12.8%)	6 (2.5%)	242 (38.6%)
総計	2 (0.3%)	20 (3.0%)	561 (84.7%)	69 (10.4%)	10 (1.5%)	662 (100.0%)

表 3. 所属と出生時体重

	体重					合計
	1kg	2kg	3kg	4kg	5kg	
児童	0 (0.0%)	19 (4.5%)	397 (94.5%)	3 (0.7%)	1 (0.2%)	420 (63.4%)
非児童	7 (2.9%)	35 (14.5%)	192 (79.3%)	7 (2.9%)	1 (0.4%)	242 (36.6%)
総計	7 (1.1%)	54 (8.2%)	589 (89.0%)	10 (1.5%)	2 (0.3%)	662 (100.0%)

先に示した出産に対する理解の程度を確認する質問項目である在胎期間と出生時体重との両方共に正答した者を「基礎知識有り」、いずれか一方でも誤答した者を「基礎知識無し」と定義して、女子大学生の学年別に比較したものを表 4 に示す。

「児童」と「非児童」とを比較した場合、総計で 17.2%「児童」の方が「非児童」より「基礎知識有り」が多くなっている。「児童」では 2 年が最も「基礎知識有り」が多く 89.2%となっており、「非児童」では 3 年が最も多く 85.7%となっている。

表 4. 所属と基礎知識との関係

		基礎知識有り	基礎知識無し	合計
1 年	児童	157 (79.7%)	40 (20.3%)	197 (70.1%)
	非児童	60 (71.4%)	24 (28.6%)	84 (29.9%)
	小計	217 (77.2%)	64 (22.8%)	281 (42.4%)
2 年	児童	157 (89.2%)	19 (10.8%)	176 (65.2%)
	非児童	52 (55.3%)	42 (44.7%)	94 (34.8%)
	小計	209 (77.4%)	61 (22.6%)	270 (40.8%)
3 年	児童	23 (76.7%)	7 (23.3%)	30 (46.2%)
	非児童	30 (85.7%)	5 (14.3%)	35 (53.8%)
	小計	53 (81.5%)	12 (18.5%)	65 (9.8%)
4 年	児童	13 (76.5%)	4 (23.5%)	17 (37.0%)
	非児童	18 (62.1%)	11 (37.9%)	29 (63.0%)
	小計	31 (67.4%)	15 (32.6%)	46 (6.9%)
全体	児童	350 (83.3%)	70 (16.7%)	420 (63.4%)
	非児童	160 (66.1%)	82 (33.9%)	242 (36.6%)
	総計	510 (77.0%)	152 (23.0%)	662 (100.0%)

赤ちゃんとの接触経験を尋ねる質問項目として、「赤ちゃんをさわったことがありますか」と尋ねたものを表 5 に、「赤ちゃんを抱っこしたことがありますか」と尋ねたものを表 6 に、「赤ちゃんに関わったり、遊んだりした経験はありますか」と尋ねたものを表 7 に示す。

基礎知識の有無で、Mann-Whitney の U 検定を用いて漸近有意確率(両側)を求めると、「さわったこと」では、差は高度に有意であり (p=.009)、「抱っこ」では、差は極めて高度に有意であり (p=.001)、「関わったり遊んだり」では、差は有意であった (p=.028)。

「さわったこと」「抱っこ」「関わったり遊んだり」の 3 項目共に、「よくあった」は「基礎知識有り」が「基礎知識無し」をそれぞれ 10.1%、9.7%、7.9% 上回り、反対に「なかった」では「基礎知識無し」が「基礎知識有り」をそれぞれ 4.2%、10.5%、5.0% 上回っている。

また、赤ちゃんとの接触経験としては、「抱っこ」の前段階として赤ちゃんに「さわる」行為を設定しているため、全般に「抱っこ」の方が「さわる」より経験値が低くなっている。

先に示した赤ちゃんとの接触経験を尋ねる質問項目 3 項で、少なくとも 1 項が「よくあった」の場合を

「よくあった」とし、3項全て「なかった」の場合を「なかった」とし、その余を「ときどきあった」として、集計したものを表8に示す。

Mann-Whitney の U 検定を用いて漸近有意確率（両側）を求めると、接触経験は基礎知識の有無で、差は有意であり（ $p=.029$ ）、接触経験は児童・非児童で、差は高度に有意であった（ $p=.003$ ）。

接触経験は、「よくあった」で「児童」が「非児童」

に対して7.7%高くなっている。

原田による「子どもとの接触経験」即ち「あなたは自分の子どもが生まれるまでに、他の小さい子どもさんを抱いたり、遊ばせたりした経験はありましたか」との比較を表9に示す。なお、原田の調査は、10か月児健診時の母親が対象であり、今回の調査では女子大学生が対象となっている点は注意を要する。また、今回の調査では、実習などで赤ちゃんと接する機会を

表 5. 基礎知識と接触経験（さわったこと）との関係

	さわったことがある			合計
	よくあった	ときどきあった	なかった	
基礎知識有り	135 (26.5%)	316 (62.0%)	59 (11.6%)	510 (77.0%)
基礎知識無し	25 (16.4%)	103 (67.8%)	24 (15.8%)	152 (23.0%)
総計	160 (24.2%)	419 (63.3%)	83 (12.5%)	662 (100.0%)

表 6. 基礎知識と接触経験（抱っこ）との関係

	抱っこしたことがある			合計
	よくあった	ときどきあった	なかった	
基礎知識有り	120 (23.5%)	303 (59.4%)	87 (17.1%)	510 (77.0%)
基礎知識無し	21 (13.8%)	89 (58.6%)	42 (27.6%)	152 (23.0%)
総計	141 (21.3%)	392 (59.2%)	129 (19.5%)	662 (100.0%)

表 7. 基礎知識と接触経験（関わったり遊んだり）との関係

	関わったり遊んだり			合計
	よくあった	ときどきあった	なかった	
基礎知識有り	131 (25.7%)	294 (57.6%)	85 (16.7%)	510 (77.0%)
基礎知識無し	27 (17.8%)	92 (60.5%)	33 (21.7%)	152 (23.0%)
総計	158 (23.9%)	386 (58.3%)	118 (17.8%)	662 (100.0%)

表 8. 所属と基礎知識と接触経験との関係

		接触経験			合計
		よくあった	ときどきあった	なかった	
児童	基礎知識有り	107 (30.6%)	213 (60.9%)	30 (8.6%)	350 (83.3%)
	基礎知識無し	19 (27.1%)	46 (65.7%)	5 (7.1%)	70 (16.7%)
	小計	126 (30.0%)	259 (61.7%)	35 (8.3%)	420 (63.4%)
非児童	基礎知識有り	42 (26.3%)	96 (60.0%)	22 (13.8%)	160 (66.1%)
	基礎知識無し	12 (14.6%)	55 (67.1%)	15 (18.3%)	82 (33.9%)
	小計	54 (22.3%)	151 (62.4%)	37 (15.3%)	242 (36.6%)
児童 非児童	基礎知識有り	149 (29.2%)	309 (60.6%)	52 (10.2%)	510 (77.0%)
	基礎知識無し	31 (20.4%)	101 (66.4%)	20 (13.2%)	152 (23.0%)
	総計	180 (27.2%)	410 (61.9%)	72 (10.9%)	662 (100.0%)

表 9. 接触経験の変遷

	よくあった	ときどきあった	なかった
1980年 大阪(原田)	42.3%	42.7%	15.0%
2003年 兵庫(原田)	32.3%	40.8%	26.9%
2013年・2014年 児童	30.0%	61.7%	8.3%
2013年・2014年 非児童	22.3%	62.4%	36.6%
2013年・2014年 全体	27.2%	61.9%	10.9%

得やすい環境にある「児童」が全体の 63.4%を占めている点にも注意を要する。このため、原田の調査対象の母集団とは、「2013年・2014年全体」よりも「2013年・2014年非児童」の方がより相対的に近いと考えられる。この点については、原田の調査結果と比較をしている他の表でも同様とあって良い。

そこで、「非児童」の結果をもとに原田の調査結果からの変遷を確認してみると、時代と共に「よくあった」が減る傾向にあり、一方、「なかった」が増加する傾向が読み取れる。

赤ちゃんの育児経験を尋ねる質問項目として、「赤ちゃんにミルクを飲ませたり、食べさせたりしたことがありますか」と尋ねたものを表 10 に、「赤ちゃんのオムツを替えたことがありますか」と尋ねたものを表

11 に示す。

基礎知識の有無で、Mann-Whitney の U 検定を用いて漸近有意確率（両側）を求めると、「授乳など」、「オムツ替え」共に、差は極めて高度に有意であった ($p=.000$)。

「授乳など」「オムツ替え」共に、「よくあった」は「基礎知識有り」が「基礎知識無し」をそれぞれ 7.1%、7.9%上回り、反対に「なかった」では「基礎知識無し」が「基礎知識有り」をそれぞれ 16.8%、17.9%上回っている。

「授乳など」「オムツ替え」の「なかった」は、それぞれ過半数の 53.5%、66.5%に達している。特に、「基礎知識無し」では「オムツ替え経験」が「なかった」者が 8割を越えている。

表 10. 基礎知識と育児経験（授乳など）との関係

	ミルクを飲ませたり食べさせたり			合計
	よくあった	ときどきあった	なかった	
基礎知識有り	73 (14.3%)	184 (36.1%)	253 (49.6%)	510 (77.0%)
基礎知識無し	11 (7.2%)	40 (26.3%)	101 (66.4%)	152 (23.0%)
総計	84 (12.7%)	224 (33.8%)	354 (53.5%)	662 (100.0%)

表 11. 基礎知識と育児経験（オムツ替え）との関係

	オムツを替えた			合計
	よくあった	ときどきあった	なかった	
基礎知識有り	60 (11.8%)	132 (25.9%)	318 (62.4%)	510 (77.0%)
基礎知識無し	6 (3.9%)	24 (15.8%)	122 (80.3%)	152 (23.0%)
総計	66 (10.0%)	156 (23.6%)	440 (66.5%)	662 (100.0%)

表 12. 所属と基礎知識と育児経験との関係

		育児経験			合計
		よくあった	ときどきあった	なかった	
児童	基礎知識有り	67 (19.1%)	143 (40.9%)	140 (40.0%)	350 (83.3%)
	基礎知識無し	7 (10.0%)	22 (31.4%)	41 (58.6%)	70 (16.7%)
	小計	74 (17.6%)	165 (39.3%)	181 (43.1%)	420 (63.4%)
非児童	基礎知識有り	14 (8.8%)	48 (30.0%)	98 (61.3%)	160 (66.1%)
	基礎知識無し	5 (6.1%)	20 (24.4%)	57 (69.5%)	82 (39.9%)
	小計	19 (7.9%)	68 (28.1%)	155 (64.0%)	242 (36.6%)
児童 非児童	基礎知識有り	81 (15.9%)	191 (37.5%)	238 (46.7%)	510 (77.0%)
	基礎知識無し	12 (7.9%)	42 (27.6%)	98 (64.5%)	152 (23.0%)
	総計	93 (14.0%)	233 (35.2%)	336 (50.8%)	662 (100.0%)

表 13. 育児経験の変遷

	よくあった	ときどきあった	なかった
1980年 大阪(原田)	22.1%	37.2%	40.7%
2003年 兵庫(原田)	18.1%	27.3%	54.5%
2013年・2014年 児童	17.6%	39.3%	43.1%
2013年・2014年 非児童	7.9%	28.1%	64.0%
2013年・2014年 全体	14.0%	35.2%	50.8%

先に示した赤ちゃんの育児経験を尋ねる質問項目2項で、少なくとも一方が「よくあった」の場合を「よくあった」とし、両方ともが「なかった」の場合を「なかった」とし、その余を「ときどきあった」として、集計したものを表12に示す。

Mann-WhitneyのU検定を用いて漸近有意確率(両側)を求めると、育児経験は基礎知識の有無で、児童・非児童共に、差は極めて高度に有意であった($p=.000$)。

育児経験は、「よくあった」で「児童」が「非児童」に対して9.7%高くなっているが、それでも2割に達していない。

原田による「育児経験」即ち「あなたは自分の子どもが生まれるまでに、他の小さい子どもさんに食べさせたり、おむつをかえたりした経験はありましたか」との比較を表13に示す。

ここでも、「非児童」をもとに原田の調査結果からの変遷をみると、時代と共に「よくあった」が減る傾向にあり、一方、「なかった」が増加する傾向が読み取れ、育児経験でも接触経験と同様の結果になっている。

接触経験と育児経験とのクロス集計結果を基礎知識の有無について表14に、属性について表15に示す。接触経験が「ときどきあった」でありながら、育児経験が「よくあった」と回答している者が1名いるが、

回答ミスであると考えられる。

表14及び表15では、どのような区分(基礎知識の有無、児童・非児童)においても、接触経験は「ときどきあった」が育児経験は「なかった」との回答が最大多数となっており、次に多い回答は、接触経験、育児経験共に「ときどきあった」である。これは接触経験では「ときどきあった」が最も多い回答であり(表8)、一方、育児経験では「なかった」が最も多い回答となっていること(表12)と呼応している。

原田による「子どもとの接触経験」の有無と「育児経験」の有無とのクロス集計結果(10か月児健診)との比較を表16に示す。原田の調査結果でも、接触経験が「ときどきあった」でありながら、育児経験が「よくあった」と回答している者が0.7%、接触経験が「なかった」でありながら、育児経験が「ときどきあった」と回答している者が1.2%含まれているが、共に回答ミスであると考えられる。

ここでも、「非児童」をもとに原田の調査結果からの変遷をみると、接触経験、育児経験が共に「よくあった」と回答した者が22.3%減少している一方で、接触経験が「よくあった」にもかかわらず育児経験が「なかった」と回答した者が7.8%増加している。また、接触経験、育児経験が共に「ときどきあった」と回答した者が7.9%減少している。

表 14. 基礎知識と接触経験と育児経験との関係

			育児経験			合計
			よくあった	ときどきあった	なかった	
基礎知識有り	接触経験	よくあった	80 (15.7%)	51 (10.0%)	18 (3.5%)	149 (29.2%)
		ときどきあった	1 (0.2%)	140 (27.5%)	168 (32.9%)	309 (60.6%)
		なかった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	52 (10.2%)	52 (10.2%)
	小計		81 (15.9%)	191 (37.5%)	238 (46.7%)	510 (77.0%)
基礎知識無し	接触経験	よくあった	12 (7.9%)	13 (8.6%)	6 (3.9%)	31 (20.4%)
		ときどきあった	0 (0.0%)	29 (19.1%)	72 (47.4%)	101 (66.4%)
		なかった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	20 (13.2%)	20 (13.2%)
	小計		12 (7.9%)	42 (27.6%)	98 (64.5%)	152 (23.0%)
基礎知識有り 基礎知識無し	接触経験	よくあった	92 (13.9%)	64 (9.7%)	24 (3.6%)	180 (27.2%)
		ときどきあった	1 (0.2%)	169 (25.5%)	240 (36.3%)	410 (61.9%)
		なかった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	72 (10.9%)	72 (10.9%)
	総計		93 (14.0%)	233 (35.2%)	336 (50.8%)	662 (100.0%)

4. 考察

本稿では、原田（2006.前掲書）の調査の一部を参考に、現代の女子大学生を対象として、出産に関する最低限の知識を尋ねた上で、育児経験と赤ちゃんとの接触経験について調査した。調査対象は、保育及び幼児教育を主として学んでいるため、一般の女子大学生よりは出産に関する最低限の知識や育児経験、赤ちゃんとの接触経験が豊富であると考えられる「児童」と、より、一般の女子大学生の状態に近いと考えられる「非児童」とに分けて検討している。

繰り返しになるが、原田の調査は、子どもの10か月児健診時に、母親の出産までの育児経験や小さい子どもとの接触経験を尋ねたものである。たとえ出産の前であったとしても妊娠期間中には、自ずと小さい子どもとの関わりが増えている可能性が高いと考えられるため、今回の女子大学生を対象とした調査結果と単純に比較できるものではないが、年々、出産前の育児経験や小さい子どもとの接触経験が減少傾向にあることは否めない。たとえば、育児経験の内容についても、より、養育者や乳幼児との関係が密でなければ経験しにくい「オムツを替えたことがある」と答えた者は、「基礎知識有り」と分類された者でも半数にも満たないことから、如何に現代の女性が子どもの世界と疎遠であるのかが理解できる。

Papousek & Papousek (1983) は、養育者-乳幼児間のやり取り parent-infant interchanges において、論理的で意識的な行動ではなく、直感的または一次的養育 intuitive or primary parenting と表現される関わり的重要性を強調している。「直感」が、これまで

に十分に積み重ねられた体験により、意識せずとも表出されるものであるとするならば、これほど子どもの世界と疎遠なまま成長し、子どもを出産した場合に、子育てに不安を感じるのは無理もないことである。

先述の原田も指摘するように、養育者が乳幼児を知らないことが現代日本の子育てを困難にしていると考えれば、現在、子育て中の養育者と子どもへの支援を充実化することは急務である。あわせて、小泉（2007.前掲書）が記している地域全体で子どもとその養育者に関わるような、今は失われてしまったかつての子育て環境に代わる状況を模索、創出していくことも、子育て・子育て支援の一貫として必要である。

現在、筆者は、ある女子大学において、「子育てを考える」という全学対象科目を担当しているが、「産むかも知れない性」としての女性を対象とした教育ということに留まらず、地域全体の子育て環境を豊かにしていくための長期的な展望を意識して講義を行っている。大学教育の一貫として、各々の学生が子どもや子育てをめぐる諸問題を学び、「今自分にできる子育て・子育て支援」を当事者として考えることは、育児環境の醸成に寄与する。

なお、本調査は、原田に倣って女性のみを実施しているが、少子化の影響によって自身が子どもの頃から成人に至るまで、育児経験や子どもとの接触経験が減少しているのは、男性でも同様である。上述した子育て・子育て支援の一貫としての大学教育という観点からは、男子学生に対しても、このような機会が与えられることが望まれる。

表 15. 所属と接触経験と育児経験との関係

			育児経験			合計
			よくあった	ときどきあった	なかった	
児童	接触経験	よくあった	74 (17.6%)	38 (9.0%)	14 (3.3%)	126 (30.0%)
		ときどきあった	0 (0.0%)	127 (30.2%)	132 (31.4%)	259 (61.7%)
		なかった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	35 (8.3%)	35 (8.3%)
	小計		74 (17.6%)	165 (39.3%)	181 (43.1%)	420 (63.4%)
非児童	接触経験	よくあった	18 (7.4%)	26 (10.7%)	10 (4.1%)	54 (22.3%)
		ときどきあった	1 (0.4%)	42 (17.4%)	108 (44.6%)	151 (62.4%)
		なかった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	37 (15.3%)	37 (15.3%)
	小計		19 (7.9%)	68 (28.1%)	155 (64.0%)	242 (36.6%)
児童 非児童	接触経験	よくあった	92 (13.9%)	64 (9.7%)	24 (3.6%)	180 (27.2%)
		ときどきあった	1 (0.2%)	169 (25.5%)	240 (36.3%)	410 (61.9%)
		なかった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	72 (10.9%)	72 (10.9%)
	総計		93 (14.0%)	233 (35.2%)	336 (50.8%)	662 (100.0%)

表 16. 接触経験と育児経験のクロス集計の変遷

		育児経験		
		よくあった	ときどきあった	なかった
接触経験 2003年 兵庫(原田)	よくあった	55.6%	33.7%	10.7%
	ときどきあった	0.7%	35.7%	63.6%
	なかった	0.0%	1.2%	98.8%
接触経験 2013年・2014年 児童	よくあった	58.7%	30.2%	11.1%
	ときどきあった	0.0%	49.0%	51.0%
	なかった	0.0%	0.0%	100.0%
接触経験 2013年・2014年 非児童	よくあった	33.3%	48.1%	18.5%
	ときどきあった	0.7%	27.8%	71.5%
	なかった	0.0%	0.0%	100.0%
接触経験 2013年・2014年 全体	よくあった	51.1%	35.6%	13.3%
	ときどきあった	0.2%	41.2%	58.5%
	なかった	0.0%	0.0%	100.0%

文献

原田正文 (2006) 子育ての変貌と次世代育成支援. 名古屋大学出版会
 小泉吉永 (2007) 「江戸の子育て」 読本世界が驚いた！ 「読み・書き・そろばん」と「しつけ」. 小学館
 厚生労働省 (2012) 厚生労働白書平成 24 年版
 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2013) 子ども・子育て関連 3 法について

Papousek, H. & Papousek, M. (1983) Interactional Failures: Their Origins and Significance in Infant Psychiatry, in Justin D. Call, Eleanor Galenson, & Robert L. Tyson (Eds.) Frontiers of Infant Psychiatry, Basic Books, Inc., Pp. 31-37
 瀬々倉玉奈 (2002) 地域における子育て・子育て支援と心理療法. 大阪樟蔭女子大学カウンセリングセンター 報告書. 創刊号. Pp. 42-46

The University's Lectures as One of the Supports for Children and Parents: A Questionnaire about the University's Female Student's Experience of Child Rearing

Faculty of Psychology, Department of Psychology
Tamana SESEKURA

Abstract

Harada, M. (2006) reported about mother's experiences with child rearing and having contact with children before becoming mothers. He calls the results of his two investigation's 'Osaka Report (1980)' and 'Hyogo Report (2003)'. He insisted that the reason for difficulty in recent mother's child rearing and child rearing anxiety came from the insufficiency of child rearing experience and an insufficiency of having contact with children before becoming mothers. The biggest reason for their insufficiency is a declining number of children.

The author investigated the university's female students to test his findings. Their experiences with child rearing, and having contact with children indicates a further decline.

For the improvement of the recent difficulty in child rearing, even non-parents have to understand and think about it from their own perspective. So, it is important to study and think about the matter of child rearing and having contact with children as one of the supports for both children and parents.

Keywords: support for infants and parents, experience with child rearing, experience with having contact with children